

---

# 茜色の瞳～たそがれの君色美空～

永月ほたる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

茜色の瞳へたそがれの君色美空

### 【Zコード】

Z2009B

### 【作者名】

永月ほたる

### 【あらすじ】

主人公・知史は、校内絵画コンクールの作品のモデルに年上の幼馴染み・茜音を望んだ。だが昔は無邪気だった彼女も、今では大人しい性格に。音楽の茜音・美術の知史。創作行為は見返りを求めるものに非ず、初心こそ全て。そうして完成した知史の作品は…。

(前書き)

この小説は、共同企画小説「色」の参加作品です。  
「色小説」で検索すると、他の方の作品を読むことが出来ます。  
「メントを下さる際には、自己紹介なども」ー 読いただけると幸い  
です。

黄昏の空に放たれた真っ赤な夕陽。

それを独り占めするかのように彼女はスイートフロアに腰掛けていた。

左手には落陽に染まる金管楽器。

たかはしあかね。

楽器ケースに書かれたそれは非規則的な、もはや記号の羅列。だがあまりに幼いその字体は、同時に物心も間もないあの日のまま彷彿させる。

そうして薄微に擦れたインクに、幾年もの年季が伺える。

「」は校舎の中でもっとも見晴らしがよく、もっとも身体を軽く感じる場所。

それを示すかのように、小柄で細い背中を這う髪先から、心地よさそうな鼻歌が流れている。

一面を朱色で彩られた空間は、長い髪の色を伺うことすら無意味と感じさせてしまうほど。

「どうかしら……？」

しばらく静止していた対象は、少しだけ不器用に肩を崩した。いきなり絵画のモデルになってくれと言ったのはオレだから、あまり無理な注文はできない。

モデルになつてもうひとつ、自体が無茶な注文だったのだし。

「うーん……もう少しだけ、右を見てもうえませんか？」

「え……せっ……じっ……かし……」

その声に混ざつて彼女の左頬が露わになつた。  
細い首が時計方向に回り、夕陽を映した瞳が遠ざかる。  
さながら“おあづけ”をされた犬にでもなつた気分。

「先輩、ちょっと行きすぎです。少しだけ、こっちに戻してくれますか？」

「え……つと、じのくらじ？」

再びオレと先輩の視線が直角に交差した。  
まるで見える線で繋がつたような、とても不思議な感じ。  
合図を送らないと、見つめ合つてしまつじやないか！

……ぱん、ぱんッ！

「すみません。少しだけ、そのままじつとしててください……」

不器用な敬語でモテルに動静の指示を送りつつ、右手に握った口  
ンテを動かす。

……わつ、わわつ、……、しゃしゃッ……。

無言の中で、茶褐色の塊だけが対象の“影”をちりばめてゆく。  
やや顎の尖つた輪郭が、ボンヤリと画用紙の上に現れた。  
髪の長さは……。

「先輩、けつ、いつ伸びましたね」

「え、な……そつかしら？」

女の子の間で“伸びる”ものは限られている。  
だが、先輩はどうも勘違いしているみたいだ。

「先輩、髪ですよ……か・み！」

「え、あ……なによう……期待させるよつた言い方しないで…」

見る見るうちに彼女の顔が赤くなる……いや、もうすでに赤いけど。

ふくふくと頬を膨らませ、監督の許可なく勝手に身動きをとる対象。

だが、オレの描きたい時間帯はもう過ぎていた。

……ぱん、ぱんッ！

「ありがとうございました。今日はこれでOKですよー！」

「え……も、もう終わり？」

先輩はちょっと驚いたような、それでいて寂しそうな表情を浮かべた。

まあ絵のモデルと言われば、何時間も動かすにおとなしくしているイメージが強い。

しかし、オレの選んだ対象はそこまで忍耐力もなさうだしつて口には出せないけど。

描き始めたのは、ちょうど太陽が西の鉄塔にさしかかった頃。

そこから山の瀬まで行くには、およそ1時間半かかる。  
つまり、こんなやり取りが1時間半も繰り返されていたわけだ。

「先輩、本来は絵のモデルって修行僧みたいなモンなんです。でも僕の描きたい絵はちょっと特別だから……また、明日もお願いできますか?」

「画家に限らず、世の職人には“こだわり”というものがある。その意味で言えば、オレの求める条件は1つのこだわりだらう。」

「ちょうど、さっきの時間帯がいいんです。夕陽が落ちそうで落ちないところが、結局は放課後になってしまふんですが……」

「……大丈夫よ。知史君の真面目なお願いだし、私も練習しなきゃいけないから」

一瞬だけ間をおいて、先輩はにっこりと笑ってくれた。

そう言って先輩が金管楽器を取り直したかと思つと、オレには理解不能な楽曲がはらはらと流れていった。

「じゃあ先輩、また明日。今日と同じ時間で!」

オレは描きかけの画用紙を大切にケースにしまい、一礼して背を向ける。

校舎を出て校門をまたいでも、彼女の音色は衰えることなくオレの耳を刺激していた。

高橋茜音。

彼女はオレより2つ上の3年生。小さな頃からの「近所付き合い」で、よく一緒に遊んだ幼馴染み。小学校も中学校も、果ては高校まで、彼女を追うように同じ進路をたどってきた。

昔からいろいろな楽器を触つていて、どれだけ2人きりのコンサートに付き合わされたことか。

とはいって、かく云うオレだって、何度も茜音をモニタに絵描きの真似事をしたものだ。

幼いながらに、互いの夢を語り合つたあの頃が懐かしい。

昔はもつと間が抜けていたのだが、高校で再会したときには、ようやくできた”普通の女子高生”になっていた。

とにかくお節介者で、慣れないことでも平氣で手を出し、そのくせ最後はオレの手助けが必要となるキャラだったのに。

だがここ最近、とくに3年になつてから彼女は変わつた。

よくは分からぬが、長年の付き合いで培つたカンだ。

もう少しマシな証拠といえば、彼女はあんなにおとなしい性格じゃなかつたということ。

「茜姉……やっぱ、変わつたよなあ……」

ちょっとだけ、オレの知らない茜音に寂しさが募つた帰り道。手にしている画用紙には、どちらの茜音が映えているのだろう。それを知るために明日もまた同じ場所に行くのなら、少し切ない。

そんな哀愁漂つ冬の空。

気がつけば、あの意味不明なメロディは止んでいた。

日付は変わり、再び放課後。

暮れゆく夕陽を称える、真っ赤な吹き抜け。

やけに大きく見える太陽は、昨日と同じ場所でオレを待っていた。

そしてもう1人、トロンボーンに夢中の赤い影。

フーンスの傍にたたずむそれは、なぜか少しだけ物悲しい。  
屋上に出た瞬間、オレが最初に目を向けたもの。

その影を振り向かせようと、オレは胸いっぱいに真っ赤な空気を  
吸い込んだ。

「せんぱーいッ！」

たまには年下っぽく見せよ、無邪気に大手を振つて見せる。

「ふ……知史君、どうしたの？」

「いや……ちよつと感動の再会っぽくしようかと」

ここで怯んでは、せっかく演じた年下の男の子が廢つてしまつ。  
そう言い聞かせ、自分でもクサくて鼻をつまみたくなるよつなセ  
リフを吹つかける。

……が、軽くスルーされてしまった。

「あは……変わらないわね、知史君は」

「どうごつくりですか？」

オレは、徹底してマイペースな先輩に少しだけ突っかかる。

「いや……べつに、大した意味じゃないよ。言つてみただけ……つてトコかしら？」

相変わらずつかみ所がないけど、その舌回りがテンションの高さを示してこるのは間違いない。

「せ、せ……先輩。時間は限られてるんですから、ビシッとお願ひしますよ？」

そう言つて彼女の機嫌をとりながら、その笑顔を描けることにオレの創作意欲は満たされようとしていた。

昨日と同じく、夕陽が山の瀬に手をつけようとしている。そして彼女も昨日と同じ姿勢でオレの視線を受けていた。

「先輩……。今日はラフが上がりますんで、ちょっと話とかしてもいいですか？」

べつに話しあ手を求めているわけではなかったのだが。そのままにしておくと、先輩はどこか遠くへ行ってしまいそうな……そんな目をしていたから。

そして、その提案に彼女は快く目線で頷いてくれた。

「……つと、じゃあ先輩、悩みとかつてありますか？」

話を吹っかけたのはオレだから、こちから声をかける。

「え……な、な……そんな口、いきなり言わないよ、普通は」

「ええ……僕は普通じゃないですから。あ、先輩……あまつ身振り手振りされると絵になりますよ？」

ちょっと悲しげな、それでいて少しだけ血色の戻った頬。夕陽のせいによく分からぬが、きっと真っ赤だろう。

画用紙には、つむきかげんにどこか遠くを眺める彼女の輪郭。

「絵は……できたのかしら？」

今度は、彼女が唐突な質問を吹っかける。

「先輩……できたら『できた』と言いますから……ね？」

「そ、そつだよね。」めんない

なんかオレの口調が真面目に聞えたせいか、彼女は申しわけなさそうに首を縮めてしまった。

「いや……そんな意味で言つたんじゃないんですよ。ほら、その……」

「べす、やつぱり変わつてないね、知史君は」

けつして嫌らしくはない微笑だが、なぜかそれはオレの心を揺さぶつた。

何が変わつていなか分からなが。

むしろ“変わつていな”からこそ“分からな”のかも知れないのだが。

そしてその言葉はオレに、ちょっとした尋問のよつた聞き方を促した。

確かに嫌らしい聞き方だが、やはりオレ自身が気になつてしまつていたのだろう……茜音を。

「先輩、僕思うんですけど……先輩は、ホントは卒業したくないんじやないですか？」

卒業を控えた3年生にとっては、あまりに皮肉な言い方かも知れない。

だがその言葉に、一瞬だけ彼女の胸元がビクンと反応したのをオレは見逃さなかつた。

「先輩が音大に進学するつて話、1年でも少しほは聞いてるんです……先輩つて、けつこう有名人なんですよ」

「へえ……優等生を演じることで有名人になれるなんて、驚きね」

疲れ混じりの溜め息に、オレは彼女の本心を射たと実感する。

「先輩つて、本当は音楽がそれほど好きじやないんですね？僕、たしか聞いたことがありますよ。中1の頃、だと思つけど」

「はあ……ですがトモ君、へんなどころで記憶力が冴えるねえ」

まあ中1の頃かどうかは、‘オレ自身が分からない。ただ、先輩が音楽好きではないことだけは知っていた。

……私は、ホントは音楽とか苦手なの。

……でもね、私が楽器を吹くヒトモ君が笑ってくれるかい。

……だから、そんなとき、私ひとつもうれしいの。

だつて……こんな私でも、世界中で1人は笑顔にさせることができるものだあ……って思っちゃうかい。

「はあ……よくもまああんなコトを高3で言えたもんだ……つたく

結局あれから昔話を掘り返してしまつて、今日は予定より少し手前で終わつてしまつたが。

かわりに、学校の都合で先輩が好きでもない音楽の道を余儀なくされていることが分かった。

「ちょっと単刀直入だつたかなあ」

でも、やはり遅かれ早かれオレは聞いてしまつたと思つ。

同時に、それは絵を描くためでもあつた。

良い絵を描くには、描く側も描かれる側もまつすぐな心でなければならぬ。

それは絵描きに限つたことではないと思ひ。

だからオレは、西音に本当の気持ちを聞いたのだろう。

彼女が今をどんな気持ちで生きているのか。

その彼女をオレはどう感じて、どう見ているのか。

2人の心が1つにならないといけないと思ったから。

だから、あんな突拍子もない言葉を吐いてしまつたんだ、きっと。

「トモ君、明日は完成させよ、……ね？」

その言葉で、オレたちは解散した。

実際、ラフは仕上がつて、スミ入れだつてすぐできる。

だが肝心な人物そのものがボンヤリとしていて、それも内面的に

「そつだから、よけいに手が進まなくて。

そしていよいよ最終日。

明日には作品を事務局へ提出しなければならない。

それはまた、先輩もといモデルとの契約期限でもあつた。

約束の時間は放課後。

オレは水彩道具も携えて屋上へと足を運んだ。

……がちや。

手にしたドアノブが生温い気がする。

その先に先輩がいる。

ただの幼馴染みではなく、絵描きとして描きたい1人の女性が。

「あ……トモ君」

その姿にオレは一瞬啞然とした。

「せ、せんぱ……い？ 何ですか、その格好は……」

そこには、思い出すのに時間がかかったものの、中学の制服を着た先輩がいた。

なぜそのかは知らないが、どうやら今日は忘れられない放課後になりそうである。

……とこりか、すでにこんな格好をした先輩だけでお腹いっぱいだつたりもする。

「あのね、今日は色塗りするんでしょ？ だから、私のいちばん描いて欲しい服を着てきたんだよ」

「それが……中学の制服ですか？」

たしかに何をするか先を読めない人だが、ここまで予想を裏切られたのは初めてだ。

でも、けつこういいかも知れない。

とりあえず下書きの最終段階、表情の描き込みから着手する。

「ところで先輩、『スプレーとか好きなんですか？』

「う……最初に言われると思つた……」

「答えになつてこませんよ?」

夕陽の悪戯ではなく、本当に先輩の顔が真っ赤になるのが分かつた。

だがその表情は昨日までと違つて、どこか優しくて、温かい。

「でも、今日の先輩はとてもいいです。なんだか、その……イキイキしてこないと云つか、何と云つか……」

「な、そんな……着てるだけで恥ずかしいんだから。そんなコト言わないで……」

「なら、こつのも格好でいいじゃないですか」

わざと否定すると分かつてゐる言葉だけを投げつけるのは、『じいじのHロオヤジ』にでもなつた氣分である。

だがその姿はとても初々しいだけでなく、最後に先輩の楽器を聞かせてもらった刻を彷彿させる。

「たしかオレが中一のときでしたよね?」

「あ、やつぱり覚えてた?」

「もちろんです。僕、先輩の演奏がとても好きでしたから」

「な……そんな、恥ずかしいコト、言わないで」

そんな風にじゅれあつてゐる間にも、着々と先輩の表情が画用紙の上に映し出されてゆく。

生き[写]し。

今オレの田の前にいる先輩、そして筆先にある一次元の先輩、どちらも一人の高橋茜音そのもの。

「先輩、もう少しですかね。あとは制服の色だけ……です」

「え、あ……うん。キレイに、ね？」

そう言つて先輩は緊張気味に視線をオレへと向けた。  
ついでつきまでの恥じらいはなく、むしろ思つて出の品で思つて出で  
浸つてこようとも見える。

「先輩……先輩にお願いした訳は、もう一つあるんですよ

「あら、何かしら？」

「あの……今日はほら、誕生日、でしょ? 先輩の……」

「え? ああ……そだね、そうだったね。あは、忘れてたよ……  
あはは」

なんというか、照れ隠しのよつな、そうでないよつな。

夕陽という小道具が似合つてゐるのか、顔の火照り具合がちょっとだけ艶かしい。

いつ見てると、なんか先輩つけていつ可愛いのかな、なんて思つてしまいそうだ。

「僕……今年は忘れないよ」メモしてたんですよ

そう言つてオレは制服の裏ポケットへと手を伸ばす。

それから唯一折り田のついているページをめくつて、彼女の田の前に差し出す。

「ふ……トモ君……そんなのよりも大事な行事は、いっぱいあると思つよ?」

だが言葉とは裏腹に、彼女の顔はクシャクシャだった。  
嬉しいのだらうか……?

「でも、しょうがないじゃないですか? 今日は先輩の誕生日なんですか?」

そうやって頭を垂れるオレの前で、姉もまたうなだれている様子。

「ねえ……トモ君?」

「な……なんですか?」

いつからかオレを凝視する瞳に、なぜか悲しさを感じた。

「もしも……もしも、だよ?」

強い仮定で彼女は話を始める。

「もし、私が……その、死ん……じゃつたら。トモ君……びつす  
る?」

「え……? ええ……死ん……?」

小さな頃、姉妹と一緒に手を取りあって歩いた遊歩道が浮かんだ。公園で遊ぶたび、オツチヨコチヨイな姉妹のかわりに怪我を重ねた記憶も。

そういうえば、路地に飛び出した姉妹をかばって一度だけ轢かれかけたことがある。

それを思い出すと、背筋が少しだけ汗ばんだ。

「あのね、私……トモ君がいなかつたらひ。とあじわいつの。や  
して、こつも思つことだ。」

そんなの、考えられない。

「それが私の出した結論。もし私の前からトモ君がいなくなつたら……なんて、それ 자체が愚問なの。そんなこと、考えたこともなかつたから」

「せ……せんぱい?」

「そんなこと考えるよつになつたら私、ホントにトモ君から田を逸らしちやうじやないかつて……でも、私にはできない」

夕陽はもつて山の瀬に押し潰されそうなまご。

その光景は、まるで今の茜姉の内面を映しているように見える。刹那、真っ赤なコンクリートに乾いた金属音が木靈した。

「トモ君……」

茜姉の悲しそうな顔を見るのは、いつ以来だらう。

「私ね、ホントは辛いの……」

その短い一言に、オレの心もまた新たな不安を覚える。

「…………うう…………えうっく…………」

突然の乾音は見る見るうちに嗚咽となり、あたり一面を覆つてゆく。

「あ、茜姉、…………？」

その展開に、もれなく五感が置いてかれるくらいの不安が付きまとつ。

カラ……ン……カ……ラ……。

それは時間にしてほんの十数秒足らずだらう。

身軽になつたトロンボーンは、いまだ休むことを知らない。だが、そこには休むことを知らない、か細い涙声もあつた。

「あの……、や、どうしたんだよ？　あ……かねえ？」

ふるふると強張つた肩に軽く手を触れたとき。

ぱむり……！

柔軟な何かがオレの右腕を程よく包み、冬空のようにじんみりとした心を現実の世界へ引き戻す。ここ数年で肥えた、わりと新しく柔らかなマシュマロのような膨らみ。

「トモくんッ！ めあーた、へんなコト考えたでしょ、うー。」

声の主が、真犯人に詰め寄る刑事の「」とく、ビアップで食い入っている。

陽気を装つた言動とは裏腹に、瞼から頬まで幾筋もの湿り気が残つていて。

それでも無理して作られた笑顔が痛々しい一方で、懸命に明るく振舞う茜姉にオレは振り回されている“フリ”をした。

「痛いですよ茜姉。そんなコト、ひとつとも考えたりこませんつてー。」

……とか、強気で言い返してしまつのはこつものこと。  
いやはや、この口調が「私がやりました」と物語つてゐんだけどな……。

校舎の影が限界まで伸び、この日も茜姉と一緒に下り坂。  
意地悪い言い様に聞こえるが、別にコイツを鬱陶しいと思つてゐ  
わけではない。

「トモ君、元気ないみたいだね。茜音お姉さんがお悩みを聞いてあ  
げましてよ?」

貴品があるのか分からぬ語調で、ゆっくりと茜音がオレの前に出  
る。

長い付き合いだが、昔からよく姉貴ぶつてオレの世話役を気取る  
さまは相変わらずだ。

「べつに、何でもないです」

そう言つて少しだけ目を下に移すが、何か反応を待つような円ら  
な瞳がオレを捕えて離さない。

「ホントかなあ? もしかして、人には言えないお悩みだったりして  
え?」

コチラの視線にあわせるように、さらにオレの顔を覗き込む。  
その仕草にちよつとだけ熱が上がり、オレは慌しく首を振つて  
しまう。

いつものよじこ緩やかな下り坂を歩くこと10分少々。

我ながら見事なまでのボロ屋が見え、視界の隅には茜音の住むア  
パートも映つていた。

互いの家に挟まれて、昔よく一緒に遊んだ小さな遊び場がある。  
ポツカリと開いた入り口にそびえる、背の低い水飲み台は当時の

まほ。

「先輩、ちょっとだけ寄つてきません?」

TVの中になら、その一声はよ」しまな展開を確定させるだらつ。だがオレたちばかりの家でもなく、思い出の詰まつた公園へと足を向けていた。

「トモ君……」

茜姉と初めて会つた、思い出の詰まつた公園。

「私のせいで……トモ君、大ケガさせちゃつたの、覚えてる?」

「いや……ケガしすぎて、どのケガか分かりませんよ」

そんな下らない冗談をスルーして、彼女は目の前に広がる朱色の光を袖口で遮りながら言葉を続けた。

「たしか8才くらいだつたかな……私がここから飛び出したのを、トモ君が助けてくれたんだよね?」

「あれは人助けなんてモンじゃなかつたですよ。タチの悪い度胸くらべみたいな感じです」

「あは……たしかに。でも、トモ君はちゃんと私をつかまえてくれた。もちろん無意識だらうけど、あのとき私、トモ君の腕の中なら安心できるつて思ったの」

「当の本人は安心どころじやなかつたんですけど……」

いや、冗談ぬきで死ぬかと思つたんだから。

あれ以来、茜姉と一緒にいるときは常に“最悪の事態”を考えるようになった。

「でも……こんな私でも……一緒にいてくれて嬉しいよ。イヤならいいから……お願い、トモ君。これからも私のそばにいて?」

いつしか宵の明星も分からぬほどに暗くなり、彼女の声がよけいに寒気を苛立たせた。

一言、一言がとても心地よく、それでいて今までに味わったことのない別の感覚が背筋を走る。

「先輩……僕は不器用で、先輩のようにはしゃぐこともできない地味な人間ですよ。先輩の足を引っ張るかもせんよ?」

「ううん……いいよ、もつともつと私を引っ張つて。そして、私がどこかに行かないくらいにトモ君のそばに引き止めて!」

ぱちくじと点滅する街灯が、田舎道であることを主張している。

そんな薄暗い中、僕たちは身を寄せ合つていた。

どれだけの時間が経つただろうか……あたりを漂う夕食の匂いにお腹が悲鳴をあげていた。

「先輩、いや茜姉……僕も、茜姉のことが好きです。なんだか、こうしているうちに茜姉のことを好きになってしまったのかも知れません」

「何よそれえ……ロマンチックじゃないよお……」

「すいません、ホントに僕って不器用ですよね？　でも……やっぱりどんなに不器用でも“好き”だという気持ちだけはホントです。眞実だと言つた方が雰囲気が出ますかね……はは……」

オレにだつて茜音を想つ気持ちはある。  
でも、今までそれを無視してきたのだと想つ。

「僕は茜姉を幼馴染みとしてしか見ませんでした。同じ年ならクラスメイト程度にしか見てませんでした。でも、やつぱり茜姉つて何かが違うんです、その……」

「私もまだちゃんと好きなのかは分からない。でも、トモ君と一緒にいると、自分がとっても幸せに見えるの。そんな人はトモ君だけ」

それはオレだつてそうだ。

茜姉以外に無理なほどに腕を一身を、心を寄せたいと思つヤツなんていない。

だから、きっとオレは彼女のことが好きなんだと想つ。

「そういうえば先輩の誕生日プレゼント、まったく忘れてましたよ……だから、僕も先輩の想いに応えられるだけのものを今ここで贈ります」

そう言つてオレは、かばんと平行に置いてあつたプラスチックケースを取り出した。

「え、トモ君……それって……」

「いいんですよ、僕だって画家にならうと迷って描いてたんじゃありません。きっと先輩と同じです」

「僕は、ホントは絵画とか苦手なんです。」

「でも、僕が絵を描くと茜姉が笑ってくれるんです。」

「だから、そんなとき、僕はとっても嬉しいです。」

「それは……こんな僕でも、世界中で1人は笑顔にさせることができるんだって思うから。」

「だから、受け取って下さい。コンクールとかなんて、ホントは初めからどうでもよかつたのかも知れません。ただ先輩を描きたかっただけなんだと思います」

「え……あ、トモくん？」

「先輩……茜姉……僕がいて、不愉快じゃないですか？　僕は、あなたを幸せにできますか？」

思わず雰囲気にのみこまれて、やや焦り気味の彼女の首元に、が

つしりと腕を巻きつける。

「ううん……、嬉しいな。私を描きたいって思つてくれるだけで嬉しいよ、トモ君……ホントに嬉しい。それはホントだよ、嘘じゃないよ」

「…………僕も、先輩を幸せにしますから…………だから、ずっと…………一緒にさせてください。もつと先輩の笑った顔を見たいです」

華奢な身体と纖細な黒い長髪が、抱きしめてこよみで実はオレを抱き込んでいた。

「先輩……なんて言わないで。茜音……茜音って呼んで、トモ君！」

「うんうん……いいじゃだよ。うん、ずっと……」

翌日。

校内絵画コンクールの審査がされた。

そして。

最優秀賞……。

1年F組　辻本知史。

タイトル。

『茜音色の瞳　うたそがれの君色美空う』

だがタイトルに人物名を入れたとして、同作品は特別賞に格下げされた。

(後書き)

長々のお世話し - お世話をいたり有難いござります。

諸用につき - 完全担当書下りしです (苦笑)

時間を縫つて修正しようとも考えておりますが - まあこれもまた1つの結果かと思つますので。

まずは企画参加を果たした1回は、ご容赦くださいませ。

では - またどこかで。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2009b/>

---

茜色の瞳～たそがれの君色美空～

2010年10月17日01時48分発行